はしがき

一橋大学創立 150 年史準備室長
阿部　修人

2020 年度の一橋大学は、新型コロナ禍による入学式中止、さらには数か月間にわたる事実上のキャンパス閉鎖という空前の事態の中で始まりました。また、白票事件や国立の文教地区指定運動など、キャンパスの国立移転以来、学園史を彩ってきた職員集会所が老朽化のため解体され、さらには、2021 年 2 月末には、1947 年の創業以来、本学における洋書コレクションの充実や教育に大きく寄与されてきた、大学通り沿いの洋書専門店、銀杏書房が閉店する等、時代の移り変わりを実感する年にもなりました。そのような中ではありましたが、学園資料室における資料収集・整理は着実に進み、小平保存図書館の、アーカイブズとしての活用にも目途が立ちつつあります。そして、ここに、無事、『一橋大学創立 150 年史準備室ニューズレター』第 7 号をお届けできたことは、ご多忙のなか執筆をご快諾頂けた執筆者の皆様、および編集に携わった一橋大学附属図書館のスタッフによる努力の賜物であります。心より御礼申し上げます。

本年度のニューズレターの企画は、大月前準備室長によるイニシアティブの下で進められており、2020 年 9 月に 150 年史準備室長に着任した私は、一読者として楽しく勉強させて頂きました。安藤名誉教授と寺西名誉教授による研究史は、専門書や論文では知ることのできない側面から一橋大学における研究の歴史を示す貴重なものです。旧満州国で生まれ、三井物産にてイラン革命を経験し、天安門事件後の中国でも活躍された稲次氏の語る壮大な人生は、グローバルで活躍されることの意味を示唆してくれます。シリーズとなっております「ゼミナールの肖像」では岡本氏、内藤氏、及び杉森氏に、お忙しい中ご寄稿いただきました。60 年代の学生紛争、70 年代の石油危機など、日本社会が大きく揺れ動いた時期に、一橋生たちが、どのようにゼミナールやアルバイト・課外活動を行っていたか、を今に伝えるもので、興味深く拝読させて頂きました。鷹野氏による、一橋大学のコンピューター事情は、本学における情報処理基盤の歴史を伝える、本学の学園史にとりとても重要なものです。青木副学長による体育会卓球部の中国遠征に関する記述は、本学と中国の結びつきがますます強くなっていく今日において、学生レベルでの対中交流が進んでいたことを伝えてくれます。田﨑氏と酒井氏による二本の力

作は、長らく本学の学園史研究に従事されてきたお二方だからこそ可能な、多くの資料を駆使し、学園史に新たな光を当てる素晴らしいものです。

以上、今回は 10 本もの玉稿を頂きました。創立 150 年が近づくにつれ、皆様方からのますますのご協力が必要になります。今後も変わらぬご支援をお願いいたします。